

## 10. 1859 次調査報告

|        |                                  |       |            |
|--------|----------------------------------|-------|------------|
| 遺跡名    | 武蔵国府関連遺跡                         |       |            |
| グリッド   | L69-7次                           |       |            |
| 所在地    | 東京都府中市美好町3-45-37                 |       |            |
| 現地調査期間 | 令和2年7月16日～令和2年7月29日              |       |            |
| 面積     | 1.4㎡                             | 遺物出土量 | コンテナ1箱(2袋) |
| 検出遺構   | その他の遺構 1基(L69-SX22)<br>[奈良・平安時代] |       |            |
| 調査担当者  | 野田憲一郎                            |       |            |
| 調査従事者  | 村田博・梅宮誠・平林彩・村田百((株)Daisan)       |       |            |



第1859-1図 調査地区位置図(1/5,000)

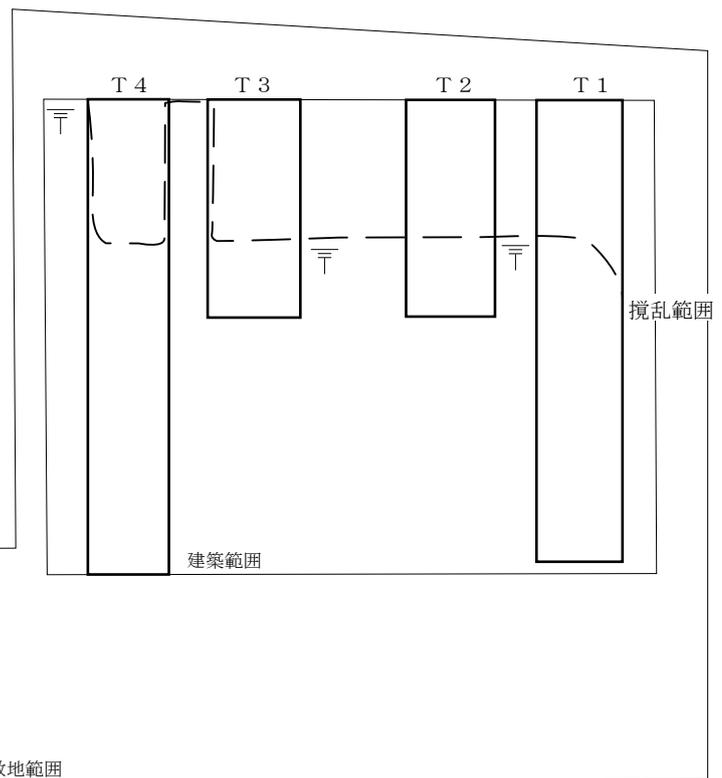
## 1 調査地区の概要

当調査地区は、JR南武線・京王線分倍原駅の西北西約480m、旧甲州街道から約240m南に所在する。地形的には府中崖線から約280m北の立川段丘上に位置し、当調査地区の南から府中外線までの間にかけて緩斜面が続く。この緩斜面は青柳段丘に相当すると考えられる。

遺跡は、武蔵国府関連遺跡の高倉・美好町地域及び高倉古墳群の範囲に該当する。古代では、現在の分倍河原駅付近を南北に縦走する古代の官道である東山道武蔵路から、約400m西側に位置する。この付近は、武蔵国府の堅穴建物分布範囲の西端にあたる。古墳時代では、高倉古墳群の範囲に属し、当調査地区の北側では、6世紀前半～中葉の円墳である高倉20号墳と、20号墳の隣接地で年代不明の円墳である高倉21号墳の周溝が発掘調査で見られている。

当調査地区の北西側には、古代の堅穴建物跡3棟、溝1条、土坑3基、古墳の周溝1条、地下式横穴墓2基等が発見された1485次調査(『概報43』)がある。南側隣接地は平成26年に1651次調査(『概報47』)が行われており、古代の溝1条、土坑1基、縄文時代の落とし穴1基、旧石器時代の礫群2ブロックが発見されている。礫群は、府中V層(武蔵野標準土層の第IV層下部)で検出された。

当該調査については、新規建物建築範囲について、令和2年7月に試掘調査を実施した。計4箇所に試掘坑を設定し調査したところ、対象地の南側三分の二は旧建物により大きく攪乱されていた。攪乱を受けず地山が残存していた範囲については、3箇所のトレンチでは遺構・遺物は確



第1859-2図 調査対象地とトレンチ位置図

認できず、最西端のトレンチにおいてのみ北西角部に遺構が確認された。よって、その箇所について本調査対象とし、引き続き本発掘調査を行った。

## 2 層序

調査地区の北壁で土層断面を確認したところ、盛土層が層厚 70～80cm を測り、府中Ⅰ層（灰褐色土）は見られなかった。府中Ⅱ層は層厚 25～30cm（GL - 約 110cm）を測り、下層よりその他の遺構（L 69 - S X 22）が検出された。

## 3 遺構と遺物

### その他の遺構

L 69 - S X 22 T 4 北側で確認された。そのほとんどが調査対象外に延び、平面形は不明である。確認できた規模は南北 1.5 m 以上、東西 0.3 m 以上、深さは調査面から約 0.65 m で、北壁断面では 0.8 m である。

上場のラインは真北に対し 40 度東へ偏している。遺構の底面は平坦ではなく、凹凸がある。人為的な掘り込みによる凹凸と判断されるが、貼床や周溝は確認できなかったため、堅穴建物跡の可能性は低いと思われる。暗褐色土を主体とする覆土の様相から、古代の遺構と思われる

北西隣接地となる 1485 次調査との関連が推察されるが、調査対象面積が狭小であり、詳細は不明である。

遺物は出土しなかった。

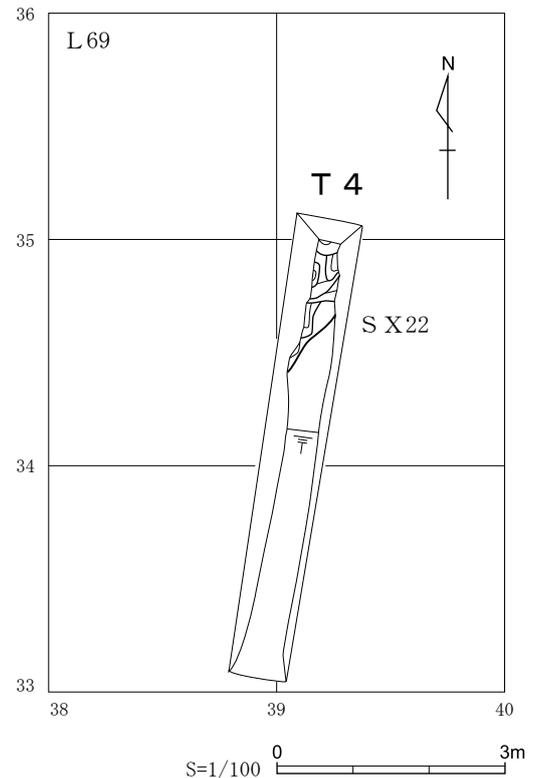
### 表土からの出土遺物

表土から古代の土師器が 2 点出土した。いずれも小片であり、図化には至らなかった。

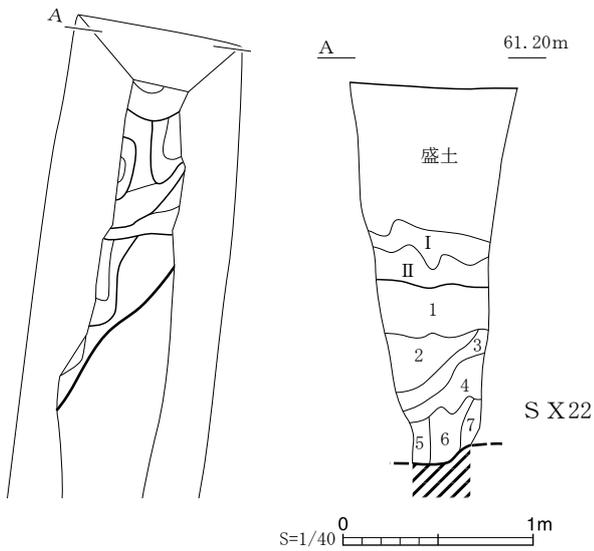
## 4 まとめ

個人住宅建設に伴い確認調査を実施したところ、遺構を確認したため、本発掘調査に切替え、実施したものである。調査区南側の大部分は旧建物により攪乱されていたが、建築範囲の北側三分の一の範囲は地山（府中Ⅲ層）が残存していた。地山残存部に試掘調査でトレンチを 4 本掘削し遺構を検出したが、西端の T 4 からのみ遺構が発見され、T 1～3 には遺構が存在しないことが確認できた。

検出された L 69 - S X 22 は、人為的な掘り込みではあるものの、底面は凹凸が残る不定形な掘り込みを呈している。遺物は出土していないが覆土の観察から古代以降のものであると推定される。S X 22 の上場の振れ角は、真北に対し東へ 40 度偏しているが、この振れ角の延長線上は未調査のため溝状の遺構になるかどうかは不明である。周辺の調査地区では、北側約 30 m 離れた 787 次調査地区において南北方向に延長する溝（L 69 - S D 3）が検出されている。この溝の推定延長上に当調査地区は位置するが、当調査地区の試掘調査で遺構が存在しない T 1～3 の位置に当たるため、L 69 - S D 3 は当調査地区まで延長していないことが明らかとなった（1859-5 図）。また、南側に隣接する 1651 次調査地区では、南北方向へ延びる溝（M 69 - S D 6）と南北に調査区外へ延びるその他の遺構（L 69 - S X 18）が検出されている。L 69 - S D 6



第 1859-3 図 調査全体図

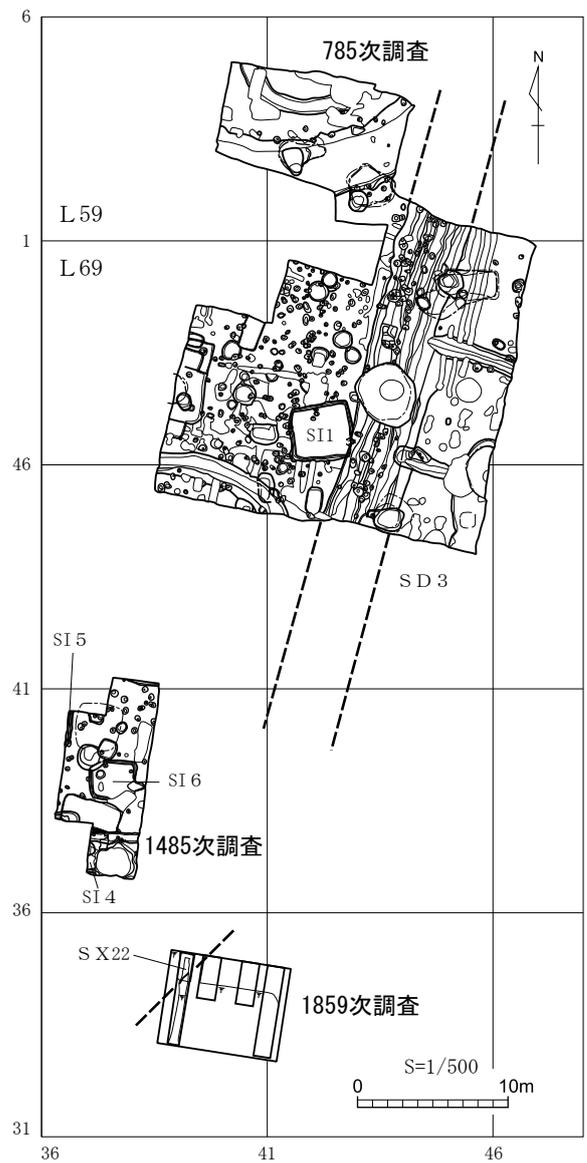


L69-SX22 土層説明

1. 暗褐色土 粘性、しまりともにやや強い。粒子やや細かい。  
φ1～3mmの黄色スコリアを微量含む。
2. 暗褐色土 粘性やや強く、しまりやや弱い。粒子やや粗い。  
φ1～3mmの黄色スコリアを少量含む。
3. 暗褐色土 粘性やや強く、しまりやや弱い。粒子粗い。φ2～3mmの黄色スコリアを少量含む。
4. 暗褐色土 粘性やや強く、しまりやや弱い。粒子粗い。φ2～3mmの黄色スコリアをやや多く含む。
5. 暗褐色土 粘性強く、しまり弱い。粒子やや粗い。φ1～2mmの黄色スコリアをごく微量含む。
6. 暗褐色土 粘性やや強く、しまりやや弱い。粒子やや細かい。暗褐色土とロームの混合土。
7. 黄褐色土 粘性強く、しまりやや強い。粒子細かい。ローム土、およびロームブロック。

| 遺構No. | グリッド        | 平面形・規模 (cm)                    | 備考       |
|-------|-------------|--------------------------------|----------|
| SX22  | L69(39, 34) | 不明,<br>南北150以上×東西<br>30以上×深さ80 | 遺構南辺のみ確認 |

第1859-4図 L69-SX22 平面図・断面図



第1859-5図 今回の調査区と周辺の調査区

は、真北に対し東へ約25度偏しており、当調査地区のL69-SX22と振れ角の差があるものの近い位置へ延長する溝である。覆土断面と掘り方の状況から深さ約1.5mの溝が埋没した後、深さ約0.9mの溝に掘り直されている。出土遺物の年代観から、古代から中世にかけての所産と見られる。今回発見のL69-SX22も古代の所産と考えられ、掘り方の深さは壁面土層では0.8mを測ることから、L69-SX6の掘り直された溝の深さに近いが、L69-SX22の掘り方は凹凸を呈しL69-SX6と大きく異なるため、同一の溝と判断するには至らなかった。なお、周辺では、古代の竪穴建物跡が複数棟分布しているが、これらの振れ角は、ほとんどが真北で、L69-SX22のように主軸が偏していない傾向にある。ごく一部の確認にとどまり、遺構の全貌は明らかにしえなかったが、遺構の掘り方から見ても竪穴建物跡の可能性は低いと考えられる。

南側の1651次調査では、縄文時代の落とし穴や旧石器時代の礫群が確認されているが、今回の調査では、これら下層の遺構は発見されなかった。



第 1859-6 図  
遺構検出状況（南）



第 1859-7 図  
調査地区全景（西）



第 1859-8 図  
北壁断面（南）